

疑問表現における「の」の機能の一側面

—前提との関わりを中心に—

牧 原 功

0. 問題の所在

日本語において平叙文の文末に頻出する「のだ」は、疑問表現においても「のか」あるいは「の」という形式として用いられている。このような「の」を用いた疑問表現は、発話に際して何らかの前提—文脈的あるいは非文脈的状況—を必要とすることが指摘されている。例えば、相手がテレホンカードを持っているかどうかを尋ねるのに、何の前提もなく「テレホンカード持っているの?」と問いかけることはまずありえない。「テレホンカード持っているの?」という質問が可能となるのは、相手がテレホンカードを使って電話をしようとしているというような非言語状況が存在する場合や、会話においてテレホンカードを持っているらしいということが推測される場合であろう。

このように「の」の使用について考察を進める場合、文脈的な条件を考慮する必要があり問題が非常に複雑なものとなってしまうが、文脈的な条件をあまり考慮しない場合でも、疑問表現において用いられる「の」には、任意に付加するものと、必須に付加しなければならないものがあるように見受けられる。

- (1) 昨日、雨が降ったの?
- (2) 昨日、雨が降った?
- (3) 誰が、これを食べたの?
- (4) 誰が、これを食べた?
- (5) どうして、そんなことしたの?
- (6) * どうして、そんなことした?

上に挙げた例文では(1)と(3)の「の」は文脈的な条件から付加されたものであり、用いられない場合でも文法的には誤りとはならない。しかし、(5)において「の」が用いられない場合は、(6)のように文法的に許容しがたい文となってしまう、どのようなコンテキストの中でも許容できないようである。このように「の」がないと許容しにくくなる疑問表現は、「どうして」、「なぜ」、「なんで」といった疑問詞が用いられるものである。

本稿では、なぜこのような疑問詞が用いられた場合「の」の使用が強制的となるのかについて考察を進めるものとする。

例文の判定については、すべて上昇イントネーションを持つ場合を想定して行った。これは上昇イントネーションを持たない場合、通常の問いかけの意味が生じず、詰問等の他の意味を表すことになるからである。また、疑問文において「か」を用いた場合、

ぞんざいな感じを与えやすいため、例文においては主に「か」を省略したものをを用いている。以後は、「の」、「のか」という形態をとる疑問表現を「ノカ疑問文」と呼び、「の」を用いない疑問表現を「カ疑問文」と呼ぶことにする。

1. 先行研究

ノカ疑問文の性質については、すでに多くの考察が行われている。それらは、疑問のスコープとの関わりから論じたものや、コンテキストをもとにノカ疑問文の使用条件を考察するという主旨のものが多いが、前述の「なぜ」「どうして」がどのような理由で「の」との共起がほぼ必須であるのかという点についての考察は少ないようである。管見の限りでは益岡1990においてこの問題が論じられているのみであるように思われる。ここでは、この益岡1990における主張を検討し、問題点を探ってみることにする。

益岡の主張においては、「課題設定」という概念が重要な位置を占めている。益岡は以下の2つの例文について、その違いを以下のように説明している。(文番号は通し番号に改めてある)

- (7) 太郎は誰にプレゼントをしたのですか。
- (8) 太郎は誰にプレゼントしましたか。

これらの疑問文は、太郎が誰かにプレゼントをしたという事態を前提としている点は、共通している。したがって、違いは、この前提と疑問文とのつながりのあり方以外は考えられない。そして、この点の違いをもたらすのが、課題設定の有無であるということになる。

すなわち、(7)は、話し手(表現者)が、太郎がプレゼントしたのは誰かという課題設定を経て提示する疑問文である。設定された課題の答えを相手に求める疑問文である。

これに対して、(8)の方は、そうした課題設定を介することなく、前提から直接に派生する疑問文である。

そして、「の」を必須とする疑問表現について次のように言及している。

「一体」や「なぜ」を含む疑問文の特異なふるまいというのは、次の例に示されるように、これらの疑問文が原則としてノダを伴って表現される点である。

- (9) 一体、誰にプレゼントをしたのですか。
- (10) *一体、誰にプレゼントをしましたか。
- (11) なぜ、花子にプレゼントをしたのですか。
- (12) *なぜ、花子にプレゼントをしましたか。

これらの疑問文がノダを必要とするのは、「一体」や「なぜ」が、課題設定の上に立って提示される問い—すなわち、説明型の疑問文—であるからに他ならない。

以上引用したように、益岡1990においては、「課題設定」という概念が重要な役割を果たしているのであるが、結局のところ、なぜ「一体」や「なぜ」という疑問詞が「の」を必須の成分として要求するのかという点については未だ明らかにされていないように思われる。つまり、益岡の用語に従えば、なぜ、「一体」や「なぜ」という疑問詞が「課題設定」を必要とし、「誰」や「どこ」が「課題設定」を必要としないのかという点が不明のまま残されていると思われるのである。

2. 疑問文の種類とノカ疑問文

疑問文において「の」が必須の成分であるかどうかという点は、疑問文がいわゆる yes-no 疑問文であるか、wh 疑問文であるかという対立によるものではなく、wh 疑問文における疑問詞の性質によるものであると考えられる。疑問詞が「いつ」「どこ」「だれ」「なに」などの場合、「の」がなくとも文法的に正しい文となるが、「なぜ」「どうして」「なんで」といった理由説明を要求する疑問詞は「の」が無い場合、許容しにくくなる。

- (13) いつ上海に行くの? (ジュリエット・ゲーム)
- (14) いつ上海に行く?
- (15) どうしてやめちゃったの? (ジュリエット)
- (16)* どうしてやめちゃった?
- (17) なんで知ってんの? (シコふんじゃった)
- (18)* なんで知ってる?

また、これは益岡1990でも指摘されていることであるが、「どういう理由で」「どのような原因で」のように一語の疑問詞ではなく、連体修飾構造をもつ副詞的成分の場合は「の」を用いない場合でも文法性は低下しないという現象もみられる。

- (17) 産業革命はどのような原因で起こったのですか?
- (18) 産業革命はどのような原因で起こりましたか?

以下では、このような現象を説明するにあたり、質問と前提となる文脈とのかわりという観点から、順に yes-no 疑問文における「の」、格成分に相当する wh 疑問文における「の」、副詞的成分に相当する wh 疑問文における「の」について考察を進めることにする。

3. yes-no 疑問文における「の」

先に「のか」は何らかの前提を必要とする表現であることに触れた。疑問文における「の」については、佐治1972、水野1990等において、「既成命題」「命題を真であると話し手が見なしている」といった機能が想定されている。本稿はこのような主張を否定するものではないが、「のか」の基本的な機能として、「のだ」と同様の「関係づけ」を想定することにしたい。これは、発話に先立つなんらかの前提と質問とを関係づけるというような緩やかなものである。これは、国広1984における「文脈情報との関連」という概

念や井上1991の主張する「受信情報の疑問文」と関連するものであると思われる。

(19) 壁のパネルを見上げる亮子。

亮子：これ叔母さんが撮ったの？ (レディ！レディ)

??これ叔母さんが撮った？

例文(19)では、写真を撮ったか撮らなかつたかが問題とされているのではない。誰かが写真を撮ったということは明らかなのであって、それを前提として、叔母が撮ったのかどうかを問いかけている。ここでは「撮った」という事態の成立が前提となっていると考えられる。しかし、(20)では、「買った」という事態が成立しているわけではない。

(20) テーブルに飲みかけのビール瓶が置かれ、修造がウォークマンを耳に、座敷の縁側で雨に濡れた洗濯物を取り込んでいる。春、スーパーの紙袋をテーブルに置き、父親の傍へ行く。

春：父さん、それ買ったの？ (ぼくと、ぼくらの夏)

??父さん、それ買った？

ここでは、ウォークマンを何らかの方法で入手したということが前提としてあるのであり、その入手方法が「買う」という行為だったかを問いかけている。もっとも、「買う」という行為を①品物を入手する②その際、品物と引き替えにお金を払う、という2つの意味から成り立っていると考えれば、そのうちの①の事態は成立しているということから、述語の表す事態の一部が成立しているということを前提としていると考えることもできるだろう。このような場合は「の」が用いられない場合、許容度はかなり落ちる。

このような、述語の表す事態が既に成立していること以外にも、前提として機能するものに推論の根拠とも呼ぶべきものがある。

(21) 黒沢：生放送のドラマでとちっちゃった。

徹子：セリフ多かったの？ (トットチャンネル)

セリフ多かった？

(22) 間宮：あなたと、もう、仕事ができないんです。

英雄：制作を離れるの？ (異人たちとの夏)

?制作を離れる？

(23) 本箱の隅に、中学時代に写したレオタード姿の君江と訓子と麻子、三人が並んだ写真が飾ってある。

春：体操部だったの？ (ぼくと)

体操部だった？

例文(21)は、「ドラマとちっちゃった」という状況から「セリフが多かった」という事態を推論によって導き、推論が正しいか否かを問いかけていると考えられるが、推論によって導いた命題「セリフが多かった」と推論の根拠となった「ドラマとちっちゃった」という状況とを関係づけるのが「の」の働きであると思われる。このような場合「の」は省略可能であり、推論の根拠は前提として明示する必要性が少ないようである。(22)がやや許容度が落ちるのは、2人称ル形では聞き手の意志を問いかけることになるというモ

ダリティ的な制約によると考えられる)

しかし、推論の根拠となるものは常に前提として明示する必要が少なくと考えることはできない。

(24) かおる：知ってる？あの一と、トップの沖田先生の前の奥さんよ。

徹子：え!? 沖田先生って結婚されてたの？ (トット)

??え!? 沖田先生って結婚されてた？

(25) かおる：長野から、始発できたのよ。

徹子：長野に戻ってたの？ (トット)

??長野に戻ってた？

(24)(25)の例文では、推論の根拠となる発話・状況が前提となっていると考えられるが、ここでは(21)~(23)とは異なり、「の」が無いと許容しにくくなるようである。

以上のように、ノカ疑問文は、何らかの前提を必要とする表現であると考えられることができる。そして前提と問いかけとの関係づけのあり方にはいくつかの段階が存在しており、それが「の」を必須の成分とするか任意の成分とするかということに関わっていると考えられる。これをまとめると次のようになる。

(a) 述語の表す事態が既に成立しており、事態の成立を前提にそれ以外の情報について問いかける場合。

これ、叔母さんが撮ったの？

父さん、これ買ったの？

(b) 推論の根拠(前提)から推論される状況と、それまで話し手が想定していた状況とが異なる場合。

結婚してたの？

長野に戻ってたの？

(c) 推論の根拠(前提)から命題を導き、その真偽を確認する場合。

セリフ多かったの？

制作を離れるの？

体操部だったの？

(d) 前提を持たない場合。

テレフォンカードもってる？(「の」の使用は不可)

前提の役割は(d)→(a)へと大きくなり、前提の存在が大きくなるほどそれを明示する必要が生じ、「の」の使用が必須のものとなっていくようである。

4. wh 疑問文における「の」

4.1 「の」を必須としない wh 疑問文

wh 疑問文のうち「いつ」「どこ」「だれ」「何」といった、格成分に相当する疑問詞を用いるものは、文脈的な状況によって「の」が必要となる場合があるものの、「の」がなくとも文法的には正しい文となる。もっとも、ノカ疑問文とカ疑問文の表す意味は同一

ではない。

(26) 誰が行くのか。(誰が行くの?)

(27) 誰が行くか。(誰が行く?)

この両者の表す意味の違いについて、佐治1972は例文(26)では「行く」ことが既に決まったこととして取り扱われているのに対し(27)では「行く」こと自体にも疑問が向けられていると説明している。同様の主旨を持つものにマクグロイン1980があるが、そこでは次の例について、a. は話し手が聞き手と行き先を話し合おうとしているのに対し、b. は聞き手は既にどこに食べに行くかを決めており、その行き先を問いかけているとしている。

(28) 友達同士でお昼を食べに行こうとして

a. 今日はどこに行く?

b. 今日はどこに行くの?

このように、格成分に相当する wh 疑問文では「の」は「既成命題」を形成する一命題を既に定まったものと見なす—という機能を果たすと考えられる場合が多い。しかし、文末のテンスがタ形の場合はこのようなニュアンスの差は失われてゆくようである。

(29) a. 誰が行った?

b. 誰が行ったの?

(30) a. 昨日はどこに行った?

b. 昨日はどこに行ったの?

水野1990ではこの点について、「過去や現在の事実について語るとき、その命題が真であるということがノカの付加にかかわらず、一般的には含意されているということが、質問文においても言えるからである」と説明されている。本稿の立場も同様である。

このような場合の「の」は、既成命題を形成するというよりも、「行った」という情報を話し手が入手するに当たっての前提となる文脈の存在を示すものとして機能している、「行った」という情報を話してどこかから入手したことを示しているのではないだろうか。言い換えれば、情報の一部欠落した命題について、その命題を導く何らかの根拠が存在することを示すマーカ—として用いられていると思われる。

4. 2. 「の」を必須とする wh 疑問文

4. 1. 節における wh 疑問文とは異なり、「なぜ」「どうして」「何で」といった疑問詞を用いた疑問文は、「の」を用いないと許容しがたい文となる。

(31) 何で私が空手やんなきゃなんないの?

(バカヤロー 3)

*何で私が空手やんなきゃなんない?

(32) 何であたしがこんなひどいめにあわされなくちゃならないの?

(さよならの女たち)

*何であたしがこんなひどいめにあわされなくちゃならない?

(33) どうしてそんな危ないところに行ったの?

* どうしてそんな危ないところに行った？

ここで問題となるのは、現在や過去の事象について問いかける場合、「いつ」「どこ」「だれ」「なに」といった疑問詞を用いた場合はカ疑問文とノカ疑問文とでほとんどニュアンスの差が生じず、「の」がなくてもよかったのに、なぜ(32)(33)のように「なんで」「どうして」という疑問詞を用いると「の」が必須となるのだろうかということである。「の」の機能を「既定命題」を作るという一面に固定して考えてしまうと、この点を説明することは難しくなってくるように思われる。

このような現象も、「の」が質問文と関係づける前提に起因する問題であると考えられるのではなかろうか。「なんで」「なぜ」「どうして」という疑問詞は、話し手が、問いかける対象の取った行動を理解できない場合に使われることが多いであろう。さらに例文に見られるように「こんなひどいめ」「そんな危ないところ」という表現は、通常、常識的に考えられないような行動が見られる場合に用いられるものであるように思われる。これはつまり、話し手が何らかの根拠をもとにして想定する状況と、現実の状況とが一致しないということである。そして、「の」は話し手の想定する事態と、現実の事態を明示する文脈的な前提とを関係づける働きをしており、両者が食い違うことを明示するメーカーとして機能しているのではないだろうか。

次に示す例は疑問詞を用いたものではないが、やはり話し手の想定する事態と現実の事態とを関係づける働きをしており、両者が食い違うことを示す機能を果たしていると考えられるものである。

(34) あれほど言ったのに、君は言うことをきかなかったの？

* あれほど言ったのに、君は言うことをきかなかった？

ここでは、「言うことをきかなかった」ということは既に成立した事態である。一方、話し手は「あれほど言った」のだから「言うことをきく」はずだと推論するのだが、実際には「言うことをきかなかった」という状況を文脈的に明示する前提が存在しているために、食い違う両者を関係づけているようである。

これは、3節において考察した前提のありかたにおける、(b)推論の根拠(前提)から推論される状況と、それまで話し手が想定していた状況とが異なる、という場合とよく似たものである。yes-no 疑問文では(b)のような場合「の」は必須だったが、「なぜ」「どうして」を用いた wh 疑問の形式が「の」を必須とするのも、やはり同様の現象であると思われる。

これに対し「どんな理由で」「どのような原因で」という質問を行う場合、問いかけの対象となる行為が話し手の想定し得なかった事態であるというニュアンスはなく、ただ単に理由や原因を問うだけであるように思う。それゆえ、「の」が用いられなくても適切な文となると考えられる。

以上、前提との関わりのレベルという観点から「なぜ」「どうして」「何で」といった疑問詞を用いた疑問文では「の」が必須と成るのかが説明できるということを提案した。しかし、よく観察してみると「なぜ」「どうして」を用いた疑問文でも「の」を用いない

ものが見受けられる。

(35) 会社訪問の面接で

- a. どうしてこの会社を選びました？
- b. どうしてこの会社を選んだのですか？

例文(35)においては、a. のように「の」を用いずとも許容度は低くならない。このような場合、話し手の側で「この会社を選んだ理由」が十分に想定しうるものであり、「この会社を選ぶ」ということが話し手の想定する事態と異なることにはならないからであろう。同様の例として、問題を解いた学生に対して「どうしてそう思った？」と問いかける場合等があげられるだろう。問題が易しい場合「どうしてそう思ったの？」と問いかけると、相手が答えを間違えているような含みがあるように感じられ、問題が難しい場合には、相手が正解を提示しているような含みが感じられる。日常の言語使用においても、このような状況においてノカ疑問文とカ疑問文のどちらを使うべきかしばしば迷うことがあるのだが、なんの含みももたせずに問いかけるために「どうしてそう思った？」を意識的に用いていることが多いようである。

ところで、例文(35)における「この会社」を「こんな会社」という否定的なニュアンスをもつ言葉に変えると、(36)のように「の」がないと不自然になるようである。

- (36)* a. どうしてこんな会社を選びました？
b. どうしてこんな会社を選んだのですか？

(36)では、話し手にとって意外な事態という含みが生ずるが、これも「こんな会社」を選ぶとは考えられないという、話し手の想定する事態と、現実の事態を明示する文脈的な前提とを関係づける働きを「の」が果たしており、両者が食い違うことを明示するマーカーとして機能しているということによると考えられる。

5. おわりに

本稿では、疑問文における「のか」の果たす機能について、前提との関わりという観点から考察した。そして、問いかける内容と前提との関係づけのなされかたによって「の」が必須となるものから、用いることのできないものまでいくつかの段階があることを示した。そして、「どうして」「なぜ」といった疑問詞を用いる疑問文において、「の」が必須となる現象も、同様に問いかける内容と前提との関係づけのなされかたに起因するものであるということを出張した。

しかしながら、これはあくまでも疑問文における「の」機能の一つの側面について考察したものであり、これが疑問文における「の」の機能のすべてであるというわけではないことは言うまでもない。疑問のスコープに関わる「の」の問題や、平叙文における「のだ」との関連から「のか」を統一的に記述するというような問題については触れることができなかった。これらの点は今後の課題である。

[付記] 本論文は1991年度提出の修士論文をもとに、その一部を加筆修正したものである。論文の作成

に当たりご指導下さった高田誠先生をはじめ、本稿の執筆に当たりご助言くださった草薙裕先生、荻野綱男先生に感謝申し上げます。

本稿で使用した例文の出典は以下の通り

シナリオ「トットチャンネル」	『シナリオ』1987-9
「さよならの女たち」	『シナリオ』1988-2
「異人たちとの夏」	『シナリオ』1988-10
「ジュリエット・ゲーム」	『シナリオ』1989-3
「レディ！レディ」	『シナリオ』1989-12
「バカヤロー3」	『シナリオ』1990-11
「ぼくとぼくらの夏」	『シナリオ』1990-12
「シコふんじゃった」	『シナリオ』1992-2

出典の明記されていないものは作例である。

参考文献

- 安達 太郎 (1989) 「日本語の問い返し疑問文について」『日本語学』8-8
- 井上 優 (1991) 「受信情報の疑問文」日本語シンポジウムにおける口頭発表
- 益岡 隆志 (1990) 「説明の構造」『日本語の文脈依存性に関する理論的実証的研究(2)』平成元年度科学研究費総合研究(A)研究成果報告書
- (1992) 「不定性のレベル」『日本語教育』77
- 国広 哲弥 (1984) 「『のだ』の意義素覚え書き」『東京大学言語学論集』84
- 駒田 聡 (1986) 「ノダの機能—“日常的推論”の視点からの一考察」大阪外国語大学修士論文
- 小金丸春美 (1988) 「問答文におけるノダの使用条件」筑波大学地域研究科修士論文
- 佐治 圭三 (1972) 「『ことだ』と『のだ』—形式名詞と準体助詞—(その二)」『日本語・日本文化』3 大阪外国語大学留学生別科
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法1:「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 水野 直美 (1990) 「『のだ』の語用論的特性に関する研究」名古屋大学修士論文
- 南 不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味』朝倉書店
- McGloin, Naomi H. (1980) 'Some observations concerning NO DESU expression' The Journal of the Association of Teachers of Japanese 15

(筑波大学大学院 博士課程文芸・言語研究科 応用言語学)